

30周年のシンポジウムをおえて

井上章一

私事にわたるが、私はイタリアの建築史を、若いころにかじった。ルネッサンス期からバロック時代の本や論文に、しばしば目をとおしたものである。読んでいて気づいたのだが、イタリア人以外の研究もたくさんある。アメリカやドイツでなされる発表が、じつに多い。イタリア側は、イタリア人だけの都合で、解釈を左右しきれないんだなと痛感した。

いっぽう、日本文化史の研究は、そういう状況におかれていない。たとえば、安土桃山文化にいとむ研究者の、その大半は日本人である。日本人が日本の都合で、その読み解きを語りあってきた。海外の見解が日本の学界に影をおとすことは、考えにくい。

ルネッサンスの分析は、世界へひらかれている。だが、安土桃山文化についてのそれは、日本のなかだけで処理される。そこに問題はないのかと、私は以前から考えてきた。日本の学問を海外へ知らせることだけが、日文研の仕事ではない。外のとらえ方とであって、そのちがいにむきあうことも、たいせつな研究である、と。

2018年の5月20日と21日に、国際シンポジウムを開催した。日文研の創設30周年を記念するもよおしである。今後の学术交流をささえて下さるだろう16名の方を世界12カ国からおまねきした。肝煎り役をあたえられた私は、その特権で、今のべたような志を参加者につたえている。私たちに、発見をもたらししてほしい、と。そして、その出来栄えにも、おおむね満足しているしだいである。

*本稿は、『NICHIBUNKEN NEWSLETTER』(No.98)、国際日本文化研究センター、2018年所収のエッセイを、再掲したものです。